



Title	デンマーク語：その語順と文体についての一考察： カーレン・ブリクセンの作品を中心として(2)
Author(s)	岡田, 令子
Citation	大阪外国語大学学報. 1980, 47, p. 69-90
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80776
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デンマーク語：

その語順と文体についての一考察

——カーレン・ブリクセンの作品を中心として(2)——

岡 田 令 子

DANISH: ITS WORD-ORDER AND HOW IT
EFFECTS ON CREATING STYLES (2)

Reiko Okada

This paper is the second part of Karen Blixen studies on her style, part (1) is reported in the IDUN IV, (1978, pp. 19–40) published by the Danish Department of our University.

すでに筆者はデンマーク語学科の語科誌 IDUN IV (1978, pp. 19–40) において, Karen Blixen (カーレン・ブリクセン) の小品 “螢” を例にとりて, 彼女の文体研究の一部を発表したが⁽¹⁾, 今回はその (2) として『アフリカの農園』(*Den afrikanske Farm*, 1937) からテキストを選び彼女の文体の検討を続けてゆきたい⁽²⁾.

また将来機会があれば, 同作家の短編, エッセイ, 私信などをもテキストにしてこの小論をまとめてゆくつもりである.

I

一般に作家がその作品の書き出しに留意することはよく知られており, ブリクセンにおいてもこの事実は明らかであるため, 彼女の文体を検討するにあたって, 先ず『アフリカの農園』の冒頭 34 行をテキストに選んだ.

テキストを分析するに先だち以下数点について説明しておく.

- a) 各文に通し番号をつけ 1), 2) … とする.
- b) 次にそれが単文であれば * 印を, 複文であれば ** 印をつける.
- c) 各文を和訳し [] 中に入れるがデンマーク文の文頭 (文の分解図表 F) には下線——を
ほどし, 文の中央部の定動詞 (同 v) には——をほどす. なおこれらの和訳は文頭の

長短及びその種類を明確にするようにし、原文に近く訳したため、全文を通した和訳文とは一致しない。

d) 説明的な記述は () 中に入れた。

e) テキスト中の綴字は1948年改正以前のものである。

f) 分析の理解を助けるために、このテキストの文頭をグラフ化して小論の最後に添付した。更にこのテキストの文体の特徴をより明確にする目的で他の作家の作品と子供たち(Børn)の作文から冒頭部分を取り、同じ方法でグラフを作成しておいた。(表1～表8) (1. Blixen, 2.3 H. C. Andersen, 4. Søren Kierkegaard 5. Meir A. Goldschmidt, 6. J. P. Jacobsen 7. Cecil Bødker 8. 'Børn')

II

以下の分析においては、文体の特徴を明らかにすべく、文頭の長短、その種類、文頭と文尾とのバランス、中央部(定動詞)の種類、節の有無とその種類、更に形容詞の特徴、文相互の接続の仕方、感覚表現の有無とその種類、及び比喩などについて言及する。

この筆者のとる分析方法が、デンマーク語で書かれた文の文体をある程度明らかにするのに有効な方法であることを前回 Idun IV と比喩に関する拙論⁽³⁾において示した。

I. Kamante og Lullu

I. *Farmen ved Ngong*

Jeg havde en Farm i Afrika ved Foden af Bjærgene *Ngong*. Selve Ækvators Linie trak sig over Højlandet femogtyve Mil længere nordpaa. Men min Farm laa to Tusend Meter over Havet. Midt paa Dagen kunde man nok føle det, som om man var kommet højt op og tæt til Solen, men Eftermiddagene og Aftnerne var klare og svale, og Nætterne var kolde.

Den geografiske Beliggenhed, og Højden over Havet forenede sig her om at frembringe et Landskab, der ikke havde sin Lige paa hele Jorden. Det var sparsomt, strakt i Linierne, der var ingen Overfløddighed noget Steds og ingen Pragt i Farver eller Vegetation, som i de lavtliggende Tropelande. Farverne her var tørre og brændte som Farverne i Pottemagerarbejde. Træernes Løv var tyndt og let, opbygget paa en anden Maade end Løvet paa Træerne i Europa, det voksede ikke i Kupler, men i brede, vandrette Lag og i Parabler. Denne særegne Struktur gav de enligstaaende Træer en palmeagtig, bevinget Silhouet, eller en romantisk og heroisk Holdning, som en Fuldrigger med Sejlene givet op. Men de lange Skovbryn fik derved et mærkeligt Udseende, som om hele Skoven dirrede. Paa Græssletterne groede de gamle, krogede Tjørnetræer spredt et og et, og Græsset her var krydret som Timian og Porse, nogle Steder var Duften saa stærk, at den sved i Næseborene. De Blomster, som man fandt paa Sletten, eller paa Slyngplanterne i de jomfruelige Skove, var bittesmaa som Klitflora, dog sprang der lige i Begyndelsen af den lange Regntid en Mængde

forskellige Slags store, vægtige, tungtduftende Liljer ud paa Sletten. Der var vældige, uendelige Udsigter til alle Sider. Alt i denne Natur stræbte imod Storhed, Frihed og høj Adel.

Den vigtigste Bestanddel i Landskabet, og i Livet herude, var Luften selv. Naar man ser tilbage over et aarelangt Ophold i de afrikanske Højlande, bliver man forbavset ved at føle det, som om man havde levet i lang Tid oppe i Luften. Himlen var aldrig stærkt blaa, men oftest ganske bleg, og saa lys, at det var svært at faa øjnene op imod den, med en Rigdom af vældige, vægtløse, omskiftende Skyer, som taarnede sig op i Horisonten og sejlede hen over den. Men den havde en skjult blaa Kraftkilde i sig, paa ganske kort Afstand farvede den Højdedraget dybt, friskt himmelblaat. I Middagsheden blev Luften over Sletten levende som en Flamme der brændte, den blinkede, bølgede og randt som Vand, genspejlede og fordoblede alle Genstande og skabte store Luftsyn. Her i denne høje Luft trak man Vejret let og indaandede et vildt Haab, som Vinger. I Højlandet vaagnede man om Morgenens og tænkte: Nu er jeg der, hvor jeg skal være.

『アフリカの農園』より

第1章 ヌゴングの農園

私はアフリカのヌゴング山の麓に農園をもっていた。この高地の北方200キロメートルたらずのところを赤道が走り、農園は海拔2,000メートルに位置していた。真昼間はまるで太陽の近くまで登って来た感じがしたのだが、午後や夕方になると澄み切って涼しくなり、夜には冷えてくるのであった。

地理的な位置と高原であるということ、こゝは世界中どこにもない景観を呈していた。地味がやせて線状に伸び、どこにも余計なものはなく、植物や色彩は貧弱で、熱帯にある低地のようなものではなかった。乾燥して焼け焦げたような色は陶器づくりのそれに似ていた。木々の葉は薄くて軽やかで、ヨーロッパの木々の葉とは異った風について、丸天井のように繁らず、広がった水平線が放物線状の層になって広がっていた。この奇妙な構造は一本づつ立っている木にシュロのような帆翼をつけたシルエットをもたせるか、あるいは帆を巻き上げた快速帆船のようなロマンチックで英雄的な風彩をそえていた。それで長い森の端はまるで森全体が微かに揺れて動いているような奇妙なかつこうだった。大草原には老いて曲りくねったミモザの木がぼつぼつ生えていて、ここの草はたちじゃこう草や滔てんにんかのような香りがして、ところによってはその臭が強すぎて鼻につんとくるほどだった。草原や原始林のつる草の上などに咲いている花は、砂地の雑草のようにごく小さいものだが、ちょうど雨期のはじめには、大きく重量感があって、強烈な香りを放つ種々の百合の群が高原に咲き乱れていた。周囲はすばらしい景色が広がっていて、この自然の中のすべてが偉大で自由で比類なく気高くあろうとしていた。

この光景とこゝでの生活の中で最も重要な要素は空気そのものであった。このアフリカ高原での十数年間にわたる滞在をふり返ってみる時、まるで長い間、大気の中の高いところで暮らして

でもいたかのような気がして驚いてしまう。

空が濃い水色だったことは一度もなく、たいていは青白い色をしていた。それで、地平線上でもくもく湧き上っては動いてゆくのだが、その大きな、ふわふわとしていつも形を変えつづける雲が沢山浮かぶ蒼空に目を向けるのがむづかしい程、明るかった。

しかし大気中にはかくれた青い力の源泉があって、すぐ近くでは山の頂を深い新鮮な蒼色に染めてしまうのだった。昼間の熱気の中では高原の大気は燃えさかる炎のように活気づいてぎらぎら輝き、水のように波打って流れ、すべての物体を映し出して二倍の大きさにし、さらに巨大な蜃気楼をつくり出した。この高地の空気は呼吸がしやすく、翼のような野性的な希望を深く吸い込んだものであった。

この高原で毎朝目を覚しては、私はうってつけの場所に今いるのだ、と思った。

(文の分解図表)

F	v	s	a	V	S	A
1) jeg	havde	—	—	—	en Farm i Afrika	ved Foden af Bjæget Ngong.
4) Midt paa Dagen	kunne	man	nok	føle	det	som om man var kommet højt op og tæt til Solen,
22) Den vigtigste Bestanddel i Landskabet og Livet herude,	var	—	—	—	Luften selv.	—

(上の表の F v s a VSA については IDUN IV pp. 25~27 に説明した)

1)* Jeg havde en Farm i Afrika ved Foden af Bjæget *Ngong*. [私はアフリカのヌゴング山の麓に農園を一つ持っていた。]

テキスト中一人称単数の人代名詞 jeg [私] が主語になっているのは、この文ただ一つである。物語の冒頭で作者は農園をアフリカに所有していたという事実を、叙事詩的な口調で読者に語り始める。読者はその農園について一体何か話されるのだろうか、どのような農園だったのだろうかかと想像をめぐらし、その話を聞こうと心の準備をさせられる文章である。簡潔な中に、これから述べようとする総ての内容をこの一文の下に制御した感がある。(p. 13. 私は6000エーカーの土地を持っていた……p. 14. 私は又2~3000エーカーの牧草地を農園にもっていた…といったように、大きく節を改める場合に jeg havde の文型を用い、詳しい説明が次に続く。)

注目される音調効果は Farm i Afrika が一つのまとまりをなしており、アフリカにある農園、アフリカの農園といったまとまりを先ず最初に強く印象づける。(分解図表中に Farm i Afrika を目的語 S の域に入れ、以下 ved Foden af Bjæget Ngong は場所を示す副詞句 A 域に入れる方が適当だと考えられる。)

この宣言にも似た最初の文につづいて、農園の地理的状況が詳細に説明されていく。

2)* Selve Ækvators Linie trak sig over Højlandet femogtyve Mil længere nordpaa. [赤道自体が高地の25マイル北方を通っていた。]

(mil はデンマーク・マイルで 1 m=7.532 km. 25 mil は約 188 km となり、赤道の 1.5°~2° 南緯に高地が位置することになる。)

作者は極めて客観的に、まるで地球儀を前に置いて、農園のあった高地の位置を指し示すかのように、それが殆んど赤道直下に近かったと云おうとする。Selve (Eng. itself) は次の‘赤道’を強調する指示代名詞である。

3)* Men min Farm laa to Tusend Meter over Havet. [(だが) 私の農園は海拔2000 m のところにあった。]

2000 m の高さは、コーヒー栽培の失敗の原因ともなるが、その事を除けば作者が住むには快適な場所であった。この文は2) と共に簡単明瞭で客観的な記述であるといえる。

4)** Midt paa Dagen kunde man nok føle det, som om man var kommet højt op og tæt til Solen [真昼間にはまるで太陽のすぐ近くまで登って来たかのように感じる事ができたらう。]

‘昼間は非常に暑い’と云わず、比喩を用いて、灼熱の火の玉である太陽の真近までやってくるという想像上の動作を示す表現を用いることによって、如何に暑いかを説明している。この比喩 (smil) の中でも誇張であり、張喩 (hyperbole) として分類されるものであろう。Blixen には比喩的表現が非常に多いことに気付く。(cf. 学報 1979: カーレン・ブリクセンにみるその文体) det は非人称 (Eng. it) であり、天候、気象、寒暖などを示す時に用いられる。som om (Eng. as if) [あたかも…のよう] は一つの事実を他の何かに譬える時に用いられる。man [人] 一般に人とはという意であるが、こゝでは作者自身とみてよい。この文中では jeg [私] とせず、ごく弱い man の表現を用いることによつて 1) の jeg [私] の意味は強くなっていくことに気づく。

この4) にきて、それまでの1) 2) 3) の単文が初めて複文となり、比喩の部分が従文となっている。このことで、今まで簡潔で単調だった文のリズムに変化をもたせることになる。

5)* men Eftermiddagene og Aftnerne var klare og svale, [(だが) 午後や夕方は澄んで涼しかった。]

形容詞 sval [涼しい] は文語的で現在では kølig [涼しい] をあてる。sval は Oehlenschläger (1779—1850) が好んで用いた形容詞だといわれる (cf. Prosaens Mønstre, p. 130)。語彙が古典的であるばかりではなく、テキストでは文語的な表現がみられる。普通口語では気候を表す非人称 det (Eng. it) を主語とする文 (det var klart om eftermiddagen) となるがこゝでは Eftermiddagene [午後] が主語となっている。この二つの事から、古典的な雰囲気さをこゝにただよわせるという効果をもたらす。

6)* og Nætterne var kolde. [(そして) 夜は寒かった。]

この文も口語では det var koldt om natten となる。5) と共に古い言いまわしだという感じを

受ける。

7)** Den geografiske Beliggenhed, og Højden over Havet forenede sig her om at frembringe et Landskab, der ikke havde sin Lige paa hele Jorden. [地理的位置と海拔の高さがこゝで一緒になって、全世界に類のない景色をつくり出していた。]

こゝまでくると、前述の 2) 3) の地理的記述がこのあたりの風景の特殊性を強調するために必要な条件であったことが判明する。作者は世界中の地形や風景を知っていたわけではないが、その類のものはどこにもないと強調する特異な景色とはどのようなものだったのか。der 以下は形容詞節で Landskab [景色] を更に詳しく説明する。

8)* Det var sparsomt, strakt i Linierne, [それは余計なものではなく線状に伸びていた。]

その景色は二度形容される。すなわち最初形容詞 sparsomt [飾り気がない、質素な] と、次に動詞の過去分詞 strakt [伸びた] によってであるが、この形容詞と動詞の過去分詞という組合せで名詞を形容する表現はしばしばテキスト中に現れる。前者は静的な状況を、後者は動的な過程を説明する。

9)* der var ingen Overfløddighed noget Steds og ingen Pragt i Farver eller Vegetation, som i de lavtliggende Tropelande. [どこにも豊かさはなく、色彩にも植物にも、熱帯の低地にあるような豪華さはなかった。]

8) の sparsomt の内容を更に詳しく説明する。大たいの描写を印象的にし、次に細部にわたって説明記述して行く方法は作者の好んで用いる技法である。こゝでは読者が熱帯の景色から想像する緑したゝるジャングルといったイメージを打ち消し、更に次の文で色彩について述べる。

10)* Farverne her var tørre og brændte som Farverne i Pottemagerarbejde. [こゝの色彩は乾燥しており、陶器づくりの色彩のように焼けていった。]

色彩描写はこの作家の特徴の一つで作者は画家になるため美術学校で修業したこともあった程である (1903~6)。こゝでも形容詞 tørre (複数) と動詞の過去分詞 brændte (複数) の二語が名詞 farverne を形容している例をみることができる。色彩の様子が比喩の形で説明されている。

11)* Træernes Løv var tyndt og let, opbygget paa en anden Maade end Løvet paa Træerne i Europa, [木々の葉は薄くて軽く、ヨーロッパにある木々の葉とは異なった風についていた。]

木の葉のという所有格を表現するのに -s の形と前置詞 Paa (Eng. on) の両方を用い Træernes Løv, Løvet paa Træerne となっている。後者の方が口語的である。その上後者は…i Europa と続き [ヨーロッパの木] という Træerne を限定する形容詞句をとるために、この形が用いられたと考えられる。ヨーロッパ人である作者が、アフリカの事物を見る時、自然それを自分の見なれてきたものと対照させて観察するのは当然である。この物語全体において、事物のみならず、その他、人々、その習慣、思考法など比較して考えることになるが、その最初の箇所がこの文であ

る。paa en anden Mode end (Eng. in a different way from)。葉の形容をするのに形容詞 tyndt og let と二つ重ね、更にコンマの後、動詞の過去分詞 opbygget で説明を詳細にして行く。

12)* det voksede ikke i Kupler, men i brede, vandrette Lag og i Parabler. [それは丸天井形ではなく、横広の水平の層が放物線状に成長していた。]

文面に現れていないが木々の葉が丸天井形に繁るのがヨーロッパである (cf. ‘悲しみの土地’ p. 427)⁽⁴⁾。

特殊な景色をつくり出す色彩や形などは地理的な説明や植物について描写するにとどまらず、自然の中で伸びる線や何げない事物の形、成長方向は、しばしば、物語の内容に関する抽象的な物の考え方とも結びつけられてゆく可能性をもっている。そのような意図をもこの文に見ることができる。(cf. ‘夢みる人々’ p. 263).

13)* Denne særegne Struktur gav de enligststaaende Træer en palmeagtig, bevinget Silhouet, eller en romantisk og heroisk Holdning, som en Fuldrigger med Sejlene givet op.

[この特異な構造はぼつぼつ立っている木にシュロのような翼をつけたシルエットか、あるいは帆を巻き上げた快速帆船のようなロマンチックで英雄的な威風を与えていた。]

こゝでも形容詞 plameagtig (palme+agtig, Eng. palm+like) と bevinget (翼をつけた) 動詞の過去分詞を重ねて名詞 Silhouet を形容する技法はすでに 8), 10), 11) においてみられたものである。こゝで作者の想像は他の木へも広がるが、次に romantisk で heroisk な風ぼうを与えるという時、木々を疑人化した描き方に移っている。しかも som (Eng. as) 以下に帆を巻き上げた帆船をその風ぼうの中にみる時、作者はあたり全体を大海原にみたとゝいることが暗示されている。(cf. 海や海底に関する比喩については学報44文学編 1979, p. 94) 一般に海が無意識の世界を象徴するものとしてとらえられるとすれば、この比喩が示すように Blixen にとって意識上の現象はすぐ無意識の世界の現象と行きかうものを持っているといえる。

14)** Men de lange Skovbryn fik derved et mærkeligt Udseende, som om hele Skoven dirrede. [(しかし) 長い森の端はそのために、まるで森全体がぶるぶる震えているような奇妙な有様を呈していた。]

この文から作者の視点が個々の木から離れ、今度は遠くから全景を森として眺めていることがわかる。静かに立っている木々の形がまことに奇妙なことを、比喩をもちいて森全体を疑人化している。

15)* Paa Græssletterne groede de gamle, krogede Tjørnetræer spredt et og et, [大草原には老いて曲りくねったミモザの木々が点々と一本ずつ生えていた。]

形容詞 gamle と動詞の形容詞形 krogede で後からくる名詞ミモザの木を修飾し、更に名詞の後で動詞過去分詞 sprædt で形容する。今まで木々はシルエットとして、又森としてとらえられ

ていたが、この文でそれらがミモザであることが判明する。そしてそこが大草原であることもわかってくる。gamle (gammel の複数形 Eng. old) に老いた、という静止の状態を描写するが krogede は「曲りくねった」という動詞のもつ動作を表す形容詞でミモザの木々は立体的に描き出されてくる。接続詞やコンマを用いずにすぐ Tjørnetræer 後に *spraedt et og et* とすることで、木々があちこちにばらまかれたように生えてくる有様が鮮明に描かれている。

16)* *og Græsset her var krydret som Timian og Porse*, [(そして) こゝの草はたちじゃこう草や沼てんにかのような香りがした。]

色彩と形の面白さを描写した後、ここでは臭覚にうったえる、香りについてえがいている。(幼い作者が父につれられて散歩に出た頃を思い出すのであろうか⁽⁵⁾。) 形容詞 *krydret* は動詞 *krydre* から派生した語で、香料で味をつける意である。

17)** *nogle Steder var Duften saa stærk, at den sved i Næseborene*. [あるところでは臭が強くて鼻腔をこがす。]

前文で草の香がたちじゃこうや沼てんにんかに似ているといったが、更にこの文でそれが一体どのようなものなのかを詳しく感知的に説明を加える。*saa stærk...at* (Eng. so strong...as) 如何に強い香りかは「鼻腔をこがす程強い」という表現でその強さが表わされている。

18)** *De Blomster, som man fandt paa Sletten, eller paa Slyngplanterne i de jomfruelige Skove, var bittesmaa som Klitflora*, [高原や原始林のつる草などに咲く花は、海辺の砂地に咲く雑草のようにごく小さなものだった。]

作者の目はこゝでよくよく見ないとわからないような小さな花へと移る。乾燥して赤茶けたところにどんな花が一体咲くのだろうかと思わせるちょっとした緊張感をさそうものは *som* (Eng. which) 以下の形容詞節が長いところにある。それは、すなわち動詞 *var* (Eng. were) に来るまでの文頭が長いことである。その花はちっぽけなものなのだが、デンマークの海岸などで見られる砂地に咲く小さな花のようだと、こゝでも故郷の花と比べている。

19)* *dog sprang der lige i Begyndelsen af den lange Regntid en Mængde forskellige Slags store, vægtige, tungtduftende Liljer ud paa Sletten*. とはいえ、長い雨期の丁度初めには色々ちがった種類の、大輪で重量感がある強い香を放つ百合が一ぱい草原に咲き出したのである。]

文頭に *dog* (Eng. though) と強調の副詞が来て、18) で述べた小さな花とは対照的に今度は、大きな百合の花についてのべる。その百合を形容するために、形容詞と動詞の現在分詞をもって合成した *tungtfudtende* をあてゝいるが、この文は、形、重さ香りを表す感覚的な表現である。動詞の現在分詞 *—ende* (Eng. ...ing) を用いること事で、あたりに良い香を放っている立派な大輪の百合を目の前にするようにリアルに描写している。(色彩にはふれていないが多分白と思われる⁽⁶⁾。)

20)* Der var vældige, uendelige Udsigter til alle Sider. [周囲は壮大で広々とした景色であった。]

視点は、今後花からスケールの大きな、すでに詳細に描写してきた木や花を含めた全体の景色へとどる。

21)* Alt i denne Natur stræbte imod Storhed, Frihed og høj Adel. [この自然の中のすべてが偉大さ、自由、また高貴さにむかって努力していた。]

こゝに到るまでは外的な状況をまるでカメラのレンズを何度か代えるように、遠くからまた近くから克明に写した作者は、今、自然の姿全体を、自分の内的な理想の姿と一致させるという主観的な立場で観察する。すべてが一生懸命にこうありたいと努力していると自然を擬人化して描写している。作者の理想とする偉大さ、自由、高貴といった人間のもつ性格、抽象概念は、彼女の目の前の景色となって具象化されている。この事実は作者がこれから描くアフリカの原住民や動物の性格づけや作者自身の生活感、人生観を示唆するものである。

22)* Den vigtigste Bestanddel i Landskabet, og i Livet herude, var Luften selv. [この景色とこゝでの生活の中で最も重要な要素、それは外ならぬ空気そのものであった。]

2000 m 以上の高地に長く住むと、実際は慢性高山病にかゝるとも聞いているが、(cf. 松枝：エチオピア絵日記、岩波、1976)⁽⁷⁾ 作者にとってはそれどころか、空気は極めて大切な要素だという。この文の文頭は文尾に比して長く、述語へ来るまでに緊張感をもたせるため、文尾の二語 *Luften selv* は強調されてくる。この二語は意味内容からみても重要なのであって、それを端的に示すものとして文中主語 *Bestanddel* に *vigtigst(e)* [最も重要な] (*Engl most important*) と、形容詞の最上級の形で名詞主語を形容している。すなわち語順からみた表現形式と形容詞の語彙と又更に意味内容の三点から空気の重要性がこの文で示されていることは興味深い。

仮に *Luften selv var...* [空気そのものは...] で文を始めたとすれば、一般の叙述文、——文尾の重い普通の文だという印象を与え、長い文頭からくるクレッシェント的な緊張感をこの文に持たせることはできないであろう。更に、*Luften* だけで始めたとすれば化学的説明などがなされるのかと思われても仕方がない。このテキストの場合には、そのような感じを与えることは極力避けられるべきである。

なお補語となっている *Luften selv* の二語を検討してみると、強調代名詞 *selv* は *Luften* [空気] を強調する語で、文頭の長くて重かったこの文を最後でしめくゝり、バランスをとるため一種の鍾の役目を果していることもみのがせない。

その他、後続の文との関連性においてみても、特に *Luften* の説明をつけ加えるために、このテキスト中にある位置になければならないという理由もみられない。このように考えると、空気はその語の前にくる部分と、後続の部分との両方から強調され、この文中最も目立つ重要な語となっている。

23)** Naar man ser tilbage over et aarelangt Ophold i de afrikanske Højlande, bliver man forbavset ved at føle det, som om man havde levet i lang Tid oppe i Luften. [アフリカ高地での長年にわたる滞在をふり返ってみると、まるで長期間空中高くで暮らしてでもいたかのように感じて驚くのである。]

作者の驚きはアフリカ滞在が空中での出来事であったかのように感じるのであるが、動詞は現在形が用いられていて、後になって回顧して今も驚いている意であるが、空中に生活したという風に感じられるのは、現実味のないことなのか、はるかに高く遠いことなのかは判然としない。しかし、この比喩的表現は後続の文によって具体的に説明される。

24)** Himlen var aldrig stærkt blaa, men oftest ganske bleg, og saa lys, at det var svært at faa øjnene op imod den, med en Rigdom af vældige, vægtløse, omskiftende Skyer, som taarnede sig op i Horisonten og sejlede hen over den. [空が濃い水色だったことは一度もなく、大抵は青白かった。それだから地平線上で、もくもく湧き上って航行して行く大きくて、ふわふわとして常に形を変える雲が沢山出ている青空に目を向けるのはむづかしい程、うすい青色で明るかった。]

こゝでは前文を受けて、生活の中心となる重要な要素としての空気、また空中での生活という表現が、具体的には作者が観察しつづけた青空のことであることがわかる。色彩と形を含む感覚的な描写はこの文ではうす青色と雲の形についてなされている。13)では大平原を大海原にみたてたような表現をみたが、こゝでも雲については、(海にみたてられた)大空を航行する船を思わせる比喩的な描写がみられる。こゝで非常に長い(41語)複文で、青さの説明が加えられた後、より深い意味内容を含むと思われる次の短い単文へ移る。

25)* Men den havde en skjult blaa Kraftkilde i sig, [(しかし)大空は自らの中に一つのかくされた青い力の源泉をもっていた。]

blaa [青色] は色彩の中でも特に作者にとって象徴的な意味をもつ色である。青には skjult [かくされた] 何かを多分にもっている。このかくされた青い力の源泉と作者がみるものは他のすべてのものを青く染める力であるが、こゝでもう少し 'blaa' について考えてみる。

愛の象徴としての(通称) '青い花' (Heinrich von Ofterdingen, Novalis: 1772-1801) や幸福の象徴としての '青い鳥' (M. Maeterlinck: 1862-1949) などの作品は世界文学の読者にはよく知られている。Blixen もその短編中エピソード的に 'En blaa Historie' [青い物語]⁽⁸⁾ (cf. カーネーションをつけた若い男, pp. 43-47) や 'De blaa øjne' [青い眼]⁽⁹⁾ (cf. ピーターとローサ, pp. 281-283) をはめ込んでいる。また作者は娘時代から青空と海をあこがれ、それらの考えは 'Medvind' [追い風] と題する詩に表されている⁽¹⁰⁾。これらの作品群を総合して考えると、作者にとっての青色は愛と自由とあこがれと喜びの色であり、また自分を正しい方向に導いてくれる力の色でもあった。理実生活の中でも彼女は青色を好んだ⁽¹¹⁾。

青色を色彩感覚の領域のみにとどめず、作品の意味内容と密接に関係づけている点からみて、Blixen にとってのアフリカこそ少女時代から夢みていた自由、blaa [青] そのものであったと理解できる。なぜならこのアフリカの体験を通じて彼女の多くの文学作品が結晶したと思われるからである⁽¹²⁾。

26)* paa ganske kort Afstand farvede den Højdedraget dybt, friskt himmelblaat. [すぐ近くでそれは山の頂を深く、新鮮な空の色に染めた。]

それ——かくされた青い力の源泉——は、その力を発揮して、うす水色どころではなく、近くの峯を深く濃いあざやかな空色にしてしまう。文頭の paa ganske kort Afstand は副詞句であるが、強調的に前に出されたとみるより、むしろ習慣として、時や場所などを表す語を出すのと同様、距離を表すこの副詞句を文頭に出したとみられる。

27)** I Middagsheden blev Luften over Sletten levende som en Flame der braendte, [昼間の熱気の中で平原の大気は燃えさかる炎のように活気づいた。]

文頭の副詞句は、条件を表しているが、大気も真昼の熱気にあうと炎のようになるという比喩的表現が用いられている。空気のような様相がこの文で描写され、熱風となって荒々しく動きまわる大気の有様が形容詞用法の動詞現在分詞 levende によって生き生きと描かれている。

28)* den blinkede, bølgede og randt som Vand, genspejlede og fordoblede alle Genstande og skabte store Luftsyn. [それはぎらぎら輝き、水のように波打って流れ、すべての物体を映して二倍の大きさにし、そして巨大な蜃気楼をつくり出した。]

不思議な力をもつ大気は、こゝでまた水にたとえられる。次々と速かに動きまわる力は、時には接続詞 og を省いて blinkede, bølgede, randt, genspejlede, fordoblede と短く六つの動作をたゞみかけるように描写することによって、大気の迫力ある動きがとらえられている。

29) Her i denne høje Luft trak man Vejret let og indaandede et vildt Haab, som Vinger. [この高い大気の中ではたやすく呼吸し、翼のような野性的の希望を深く吸い込んだ。]

この文の主語は man [人] であり、意味上は作者自身をさすのであるが、主語より動作の方が重視されるため jeg [私] を用いていない。作者は野性的な希望を翼にたとえているが、幼い頃から作者は翼のようにばたける自由をあこがれていたと思える‘翼’と題する詩がある (cf. ‘Vinger’)⁽¹³⁾。またこの‘翼’は「アフリカの農園」の III 章 viii 節 pp. 174～189 にも ‘Vinger’ と称する項に通ずる箇所であり、作者は後にこの項で友人デニス (Denys Finch-Hatton) の訪問を喜ぶ様子を描き出している。(作者にあっては、しばしば物語の最初の部分が序の役目をして、後に述べる内容を暗示する。その具体例としてこの文の‘翼’は理解できる。)

30)** I Højlandet vaagnede man om Morgen og tænkte: Nu er jeg der, hvor jeg skal være. [この高原で毎朝目を覚ましては、“私はいるべきところに今いるのだ” と思った。]

主文の主語には man を用い、本文の動詞 tænkte の述語となっている名詞節の中での主語は jeg を用いて(冒頭 1)のように) jeg を強調させている。なお、この名詞節には記述をいきいきさせるために直接活法でしかも現在形を用い、当時の作者の感情を鮮明に浮き立たせるという効果をもたせている。

すなわち、作家は意図的に非人情的であったこれまでのトーンを破り、彼女の胸の高まりのようなものを見せ、アフリカで生活できる満足感を強く打ち出している。作品全体に流れる作者のよろこびの姿勢ともいうべきものが、この 30) に表されている。

III

以上 1)~30) とテキストを分析してきたが、次にその結果をまとめてみる。

1.1. グラフの表 でみると一目でわかるように、このテキストは比較的長い文頭をもっている。実際に数えてみると、文頭が一語からなっている文は10で、全体の 1/3 にすぎず、残り 2/3 は 2 語~14語からなっている。また文頭の短い文と長い文の現れ方にも注意してみると、それらが大体交互にきていると云える。

1.2. 次に文頭を構成している要素の種類をみてゆくと、主語からなるものが19文で、残り11文は副詞である。(cf. IDUN IV, pp. 27, 33, 37, ‘蜚’でも主語と副詞の二種のみであった。)

表 1. K. B. (1885-1962) Karen Blixen: *Den afrikanske Farm*, 9-10.

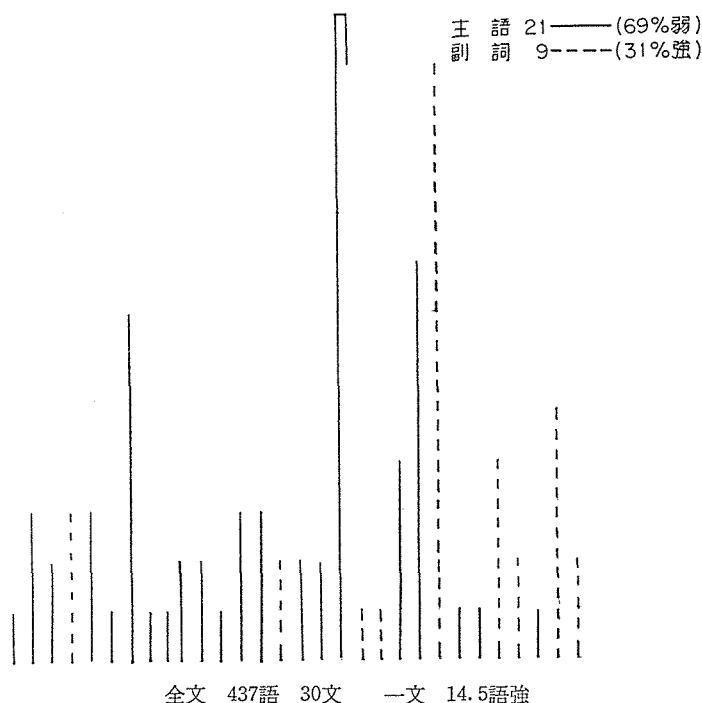


表2. H. C. A. a) (1805-75) H. C. Andersen: 'Den flyvende Koffert,' 171-2

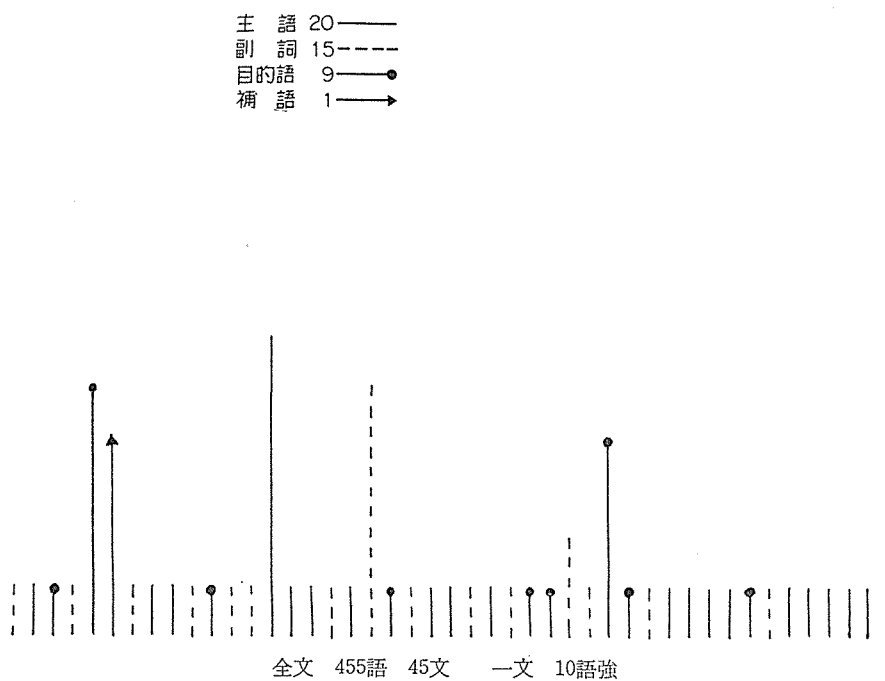


表3. H. C. A. b) H. C. Andersen: 'Svindedrengen,' 226-7

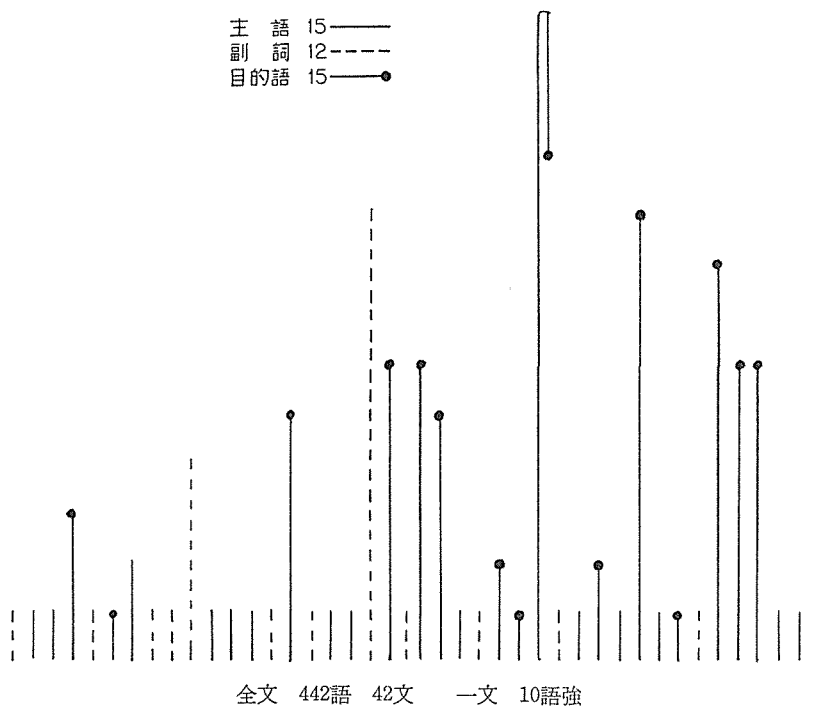
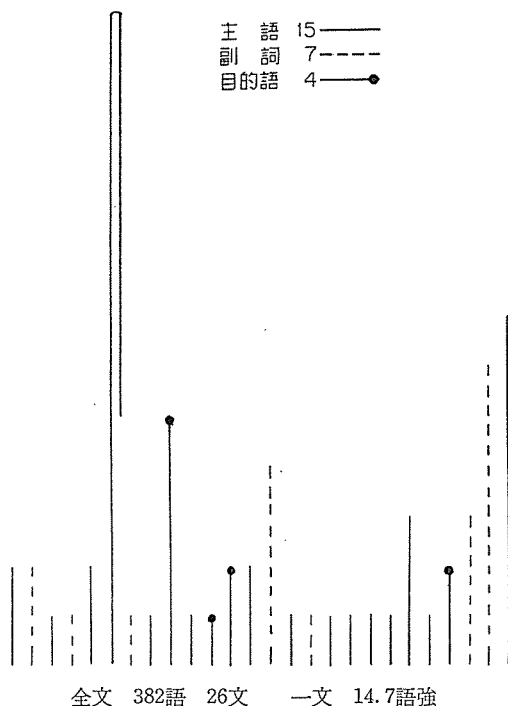


表4. S. K. (1813-55) Søren Kierkegaard:
'Sygdommen til Døden', 311-2



一般的にみても、平叙文の文頭には主語がくるのが普通で、次に副詞である (cf. 表8 Børn')。

表1. であるように、このテキスト中では副詞の文頭をもつ文が二つ以上続けて現れることはない。

1.3. 文頭の長短及びその種類を、アンデルセン (cf. 2) や他の現代作家 (cf. 表7) と比較してみると、Blixen のテキスト中の文の文頭の方が長いことが明らかになる。彼女のテキストのように文頭の長いものは概して19世紀の作家群に多くみられる (cf. 表5, 表6)。これらの作家はいわゆる古典的な文体であり、Blixen は彼らの文体に類似していることがわかる。この点が Blixen の文体の特徴の一つである。反対に短い文頭のみをもつ現代作家の (cf. 表7) ボッドカ (Cecil Bødker) は Blixen と対照的である。短い文

頭を用いる文体は現代になって始められたものではなく、早くも1830年代にその完成をみているといえる。それはアンデルセンの童話にみられる文体である (cf. IDUN IV, p. 33)。

文頭が長いということは、文の述部にきて、主語の状態や動作がわかるまでに、読者に一種の緊張感をもたせるという効果を生む。しかし、文のリズムはゆっくりしている。

文頭の種類がこのテキストでは主語と副詞の二種類であることはすでに述べたが、この点、アンデルセン (cf. 表1, 表2, 表3) とは対照的である。表2, 表3には目的語や補語が文頭にきていて変化に富んでいる。このことは文頭の短いことと相まって、文に躍動感を与え、ダイナミックな雰囲気をつくり出すのであるが、Blixen のテキストはそれとは異ったものである。彼女の文はゆったりと、また堂々とした自然の風景を表現するためのものであろう。事実、テキスト中には彼女の激しい感情の起伏はみられず、冷静な態度でアフリカの大自然を描写し、その自然と作家自身との交感を淡々と記述しているので、文体上にもそれが現れていることがこの分析で判明する。

文頭の長短とその種類の現れる状況からみて、一箇所に同種のものがたまることを避けているが、これも文のリズムを一定にし、落ちつきをもたせることになる (cf. 18), 23), の現れよう)。

1.4. 副詞が文頭にくる (倒置語順) 理由は IDUN IV p. 22 に詳しく述べたが、繰り返して簡単に説明すると、習慣によるもの、前文とのつながりを滑かにする場合、強調して効果をねら

表5. M. A. G. (1819-87) Meïr Aron Goldschmidt: 'Bjergtagen', 242.

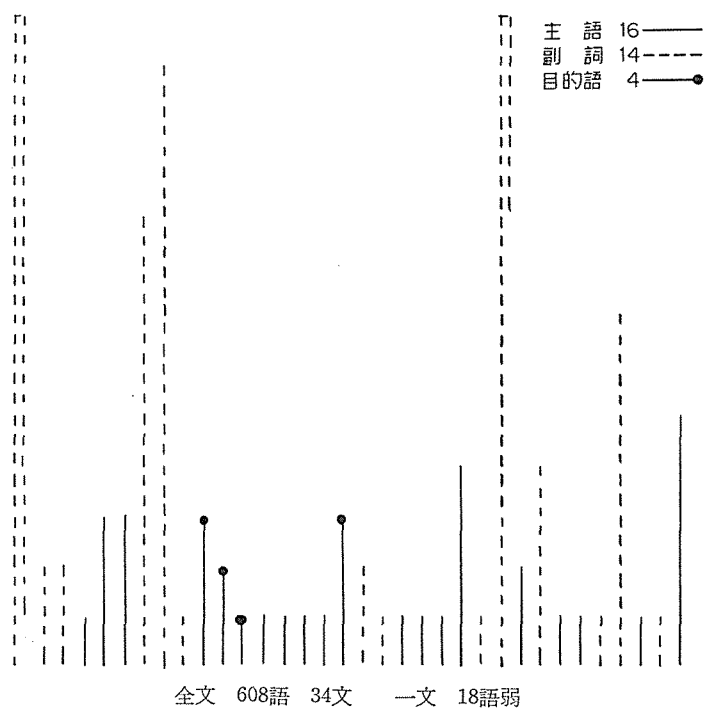


表6. J. P. J. (1847-85) J. P. Jacobsen: 'Mogens', 3-4.

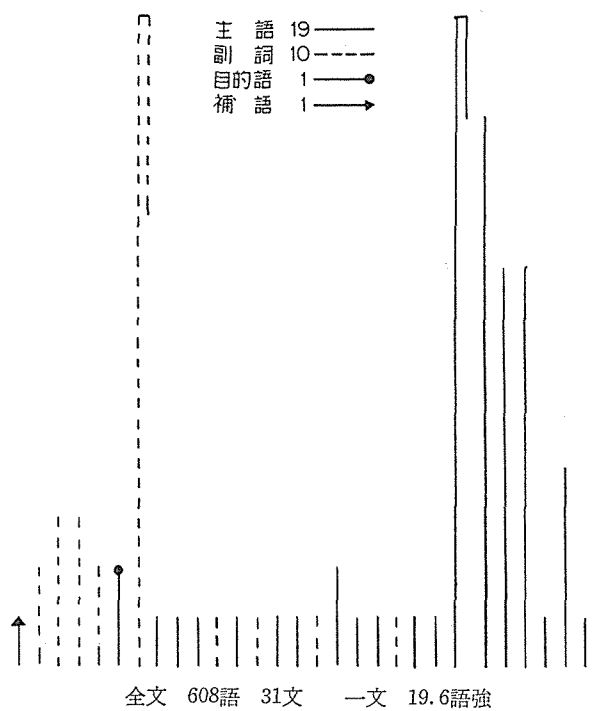


表7. C. B. (1927-) Cecil Bødker: 'Vdderen', 23-24

主 語 28 ———
 副 詞 5 - - - -
 目的語 5 ———●

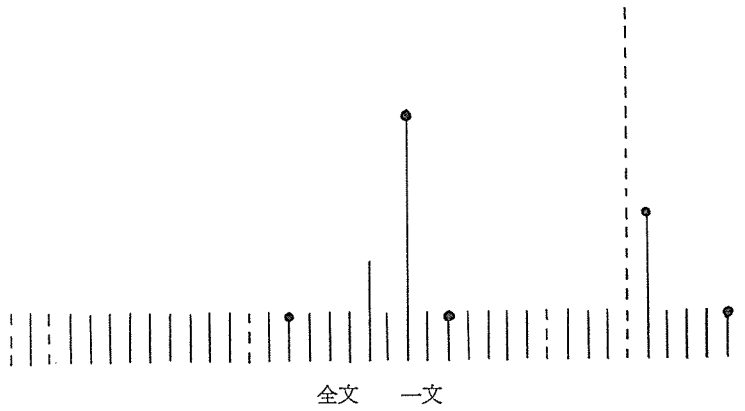
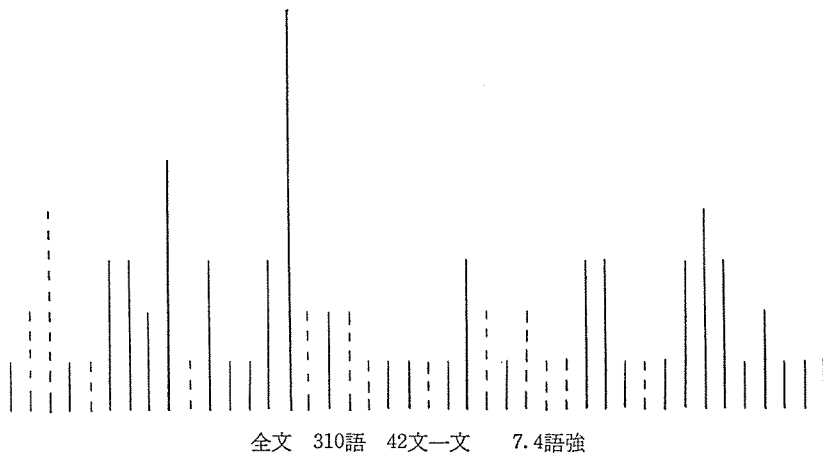


表8. 5. B. (ca. 14) 5 Børn: 'Danmark er et dejligt Land', 1.

主 語 29 ———
 副 詞 13 - - - -



う場合などに大別される。

テキスト中の副詞文頭を次にみてみると：

4) Midt paa Dagen は（習慣的に）文頭におかれうる。時を表す副詞句であるが、5) 6) の文でも文頭に、‘午後’、‘夜’と同じく時を表す語がきている。それゆえ、この副詞句は時の推移を強調するために文頭に出されたと考えられる。15) Paa Græsseltterne, 17) Nogle Steder, 29) Her i denne høje Luft は場所を 26) paa ganske kort Afstand は距離を 23) Naar man ser... afrikanske Højlande 27) I Middagsheden は条件を表している。

9) der (var ingen...) は存在を表す。19) の dog はテキストのは分析の中で述べたように強調のため文頭に出てくる。

2. 次に問題になるのは、文頭と文全体の重さ (vægt) とのバランスである。現代文では文頭が軽く、文の後の方に多くの内容を入れ、文尾を重くするのが普通であり、それによって文はバランスを保っている。文頭が長く文尾の短い場合、文全体が頭でっかちの感を与え、文頭が重くバランスがくずれ勝ちになる。しかしこれらの文は述語にくるまで緊張感をもたせ、読者に期待感を持たせるという効果をそれなりにもつわけである。(22) の例で説明したように、述部は Luften selv の二語であるのに対して文頭は9語と多く、この効果をねらっている。) 古典的文体をつくり上げようとする作家はしばしば意図的にこの文頭を重くする方法を用いて文体効果をあげている。

3. こゝでは文の第2の要素であり、文の中央域 (v s a, cf. 文の分解図表) に位置する定動詞について検討をすゝめる。

テキスト中の定動詞は自動詞 (23)、他動詞 (12)、助動詞 (1) となっている

自動詞： var (12回), bliver, blev, blinkede, bølgede, groede, laa, randt, sprang, stræbte, vaagnede, voksede.

他動詞： havde (2回), farvede, fik, fordoblede, forenede(sig), gav, genspejlede, indaandede, skabte, trak (sig), trak (vejr).

上記のように動詞36語中、自動詞が最も多い。være の過去形 var 12回がトップで次に bliver, blev と、現在形と過去形の両方が出てくるが、現在形 bliver は助動詞的に用いられている。一方他動詞では havde が2回, forenede sig, trak sig は再帰動詞である。

助動詞は kunde 一つである。

テキスト中自動詞が他動詞に比して多い (23:12) ことは、テキストの内容が静止状態にある風景描写が大部分であることから理解される。また一方他動詞をみると、その種類がある程度限定されていることがわかる。すなわち havde は主語の状態を表し、2つの再帰動詞‘一緒になる’‘伸びる’もその動作は主語に帰着し自動詞的な性格をもっている。fik, farvede, gav などの他動詞も、こゝでは動作を表すというよりも、文中の目的語がそういう状態になった結果の方が大切

である。(14)…様子になる, 26)青色になる, 13)…の威風をもつ) indaandede も目的語 et vildt Haab を取ってはいるが‘息を吸い込む’という自動詞的な意味をもち、同じように、29) trak も目的語 vejret を取っているが、これも二語で‘呼吸’することで、全く自動詞的な意味内容を表す。残りの3つ fordoblede, genspejlede, skabte が純粹の意味で他動詞的な動作を表す。このようにみると他動詞中3/4が自動詞的な意味内容を表現している。また4)の助詞詞の後にも føle と自動詞が続いている。

状態を描写する自動詞の数が多く、その上他動詞も実際の動作よりも結果としての状態を表すものが多いことがみられたこのテキスト内容は、動きの少い大自然の描写を主としていて、この内容を適切に表現する文体であることが動詞の検討からもうかゞえたのである。

更につけ加えれば、全体が23)30)を除いては、過去形で記されていることは何か理由があるのだろうかということである。作家によっては‘歴史的現在’による描写を試みるのであるが、Blixen はあえてその方法を取らなかった。これは彼女の執筆当時の落ちついて自信にみちた心理状態と関係があるのかも知れない⁽¹⁴⁾。

4. 節 (ledsætning Eng. clause)

一般的にみて学術的な文や法律文には節が多いが、散文の文学作品では古いものや古典になぞらえたものは多くの節を含んでいるといえる。テキスト中**印の文は節を含み、次のようになっている：4) som om...Solen (副詞節—比喩 7) der...Jorden (形容詞節—比較強調 14) som om...dirrede (副詞節—比喩 17) saa...at (副詞節—原因・結果の関係 18) som man... Skove, (形容詞節—どんな種類かの説明 23) Naar man... Højlande (副詞節—条件 23) som om... Luften (副詞節—前に来る det を受けて, 比喩的説明) 24) saa lys, at...Skyer (副詞節—原因・結果の関係 24) der...den (形容詞節—状態の説明 27) der brændte (形容詞節—動作の説明) 30) Nu...være. (名詞節—目的の内容説明) 30) hvor jeg skal være (副詞節—どんな場所かの説明)。

テキスト中23)24)30)は二つづつ節を含み、合計12の節がある。副詞節、形容詞節、名詞節の割合は7:4:1である。全文中9文のみが節を含んでいることは、さして多いとはいえないにしても、この事実は、テキストが全くの口語体で書かれたものではないということの一つの根拠となっている。節の中に更に節を含む、こみ入った構造のものは24)と30)である。30)は主文の動詞の目的となっている名詞節を含んでいて、この節のみが直接話法で書かれている。

副詞節には比喩、推論、説明、条件、時などの種類があり、形容詞節には比較強調や説明の記述がみられ、名詞節では述語の内容説明を行うなど、いずれの場合にも説明のための記述が多く、全体の節の半数を占めている。

5. 形容詞の並列

テキスト中では、形容詞及び形容詞用法の動詞不定形が並列して使用されている個所が目をはく。以下例をあげて検討を加える：

5) klare og svale 8) sparsomt, strakt 10) tørre og brændte 11) tyndt og let, opbygget...
 12) brede, vandrette (Lag) 13) a) palmeagtig, bevinget (Silhouet) b) romantisk og heroisk
 (Holding) 15) gamle, krogede (Tjørnetræer) 19) store, vægtige, tungtduftende (Liljer)
 20) vældige, uendelige (Udsigter) 24) vældige, vægtløse, omskiftende (Skyer)
 25) skjult blaa (Kraftkilde) 26) dybt, frisk himmelblaat

上記の12文に形容詞の並列をみたが、そのうち、最初の4つ、5) 8) 10) 11) は補語として用いられ、残りの12)～26) では名詞を修飾している。(ただし26) は副詞的に形容詞を修飾する。) 8) にみられるように、strakt は動詞 strække [伸ばす] の過去分詞で、動詞の持つ意味がなお強く残っている。この8) を除いた他の3文は、並列させる時、接続詞 og (Eng. and) を用いてあるが、修飾的に用いられた場合は13) を除いて、いずれの場合にも使用されていない。このことは次々とたゞみかける修飾語で描写に張をもたせる効果がある。

二種類の形容詞をつかっているが、その効果をみると、先ず、本来の形容詞で落ちついた状態を描写し、更に動詞の形容詞的用法を用いてみたゞみかけ、ダイナミックな動作の描写を試みている。定動詞の項 (cf. 3) でみたように、主文の動詞には動きが少いのであるが、全体の文のリズムが単調に落ち入らないのは、形容詞が細部で動的な印象を与えるからである。

なお特筆すべきことは、並列の形容詞が現れてくる文は、24) を除き、すべて単文であるという点である。作者は、節を含む複文のなかではその技法を避けており、記述が複雑になり、文に重厚な感じを与えないよう意図したことがうかゞえる。

作者がこのように文の構造によって、形容詞の用法を使いわけるとは、各々の文をすっきりと洗練させることになる。

6. 文相互の接続

1)～30) までの接続の方法をみると、本来の等位接続詞 men, og (Eng. but, and) がそれぞれ、4回、2回と用いられているのみで、接続詞の使用は極めて少い。この二語以外は用いられておらず、副詞(句、節)が文から文への円滑な接続をを助けている。このように接続詞の使用が少いことは、テキスト中の各文の歯切れをよくする。

7. 感覚的な表現

テキスト中には色彩や形に関する絵画的な表現が多く、また嗅覚や触覚に関するものも混っている。次に意味内容を和文にした上で、それらの表現を列挙してみる：

7.1. 色彩：9) (青々した) 熱帯のようではない、10) 乾燥して焼けた色、24) 空の色、25) かくれた青色の力の源泉、26) 濃い青色に染った峯。(5文)

7.2. 形：8) 線状に伸びる景色、12) 丸天井形でなく、水平の層かあるいは放物線状に茂る木の葉、13) シュロか翼をもったような形をした木、15) 曲りくねって、ぼつぼつ立つ木。(4文)

7.3. 嗅覚：16) 臭を放つ草、17) 鼻をつく強い香、19) 芳香を放つ百合。(3文)

7.4. 感触：4) 非常に暑い, 5) 涼しい午後や夕方, 6) 冷えびえする夜, 27) 熱気を含む空気, 28) 強い熱風, 29) 呼吸のしやすい空気。(6文)

テキストなんらかの感覚的な表現を含む文と含まない文の比は3:2となっている。これらの表現は種類の感覚に片よることなく、視覚、嗅覚、触覚と各種にまたがっている。(こゝでは聴覚がないが…)

たまたまこのテキストにこれらの表現が多いのか、あるいは他の作品にも多いのかは他との比較によってわかるだろうが、こゝからみただけでは Blixen の文には感覚的な表現が豊かだといえよう。

アフリカの農園について語ろうとする時、作者は例えば、その入手の方法や時期、また価格などについて記述し始める事で物語を展開させてもよいわけであるが、彼女はそうしなかった。これから物語の中で語ろうとするアフリカの原住民、自然、動植物、白人との間に起きる出来事などを読者に語る前に、農園のある高原を、形、色彩、臭い、感触を含む表現からとらえ、自己の内的な理想と合一させるという操作をしている。この方法は、今後作者が、アフリカについて物語る時事物を細かく観察し、記述し、しかもそれらと作者自身の内なるものとの出会いが、いかなる意味をもってくるかということの主たるテーマにしてゆくことに関わりをもっている。

視覚ではとらえにくい空気、大気といったものについて述べること自体を考えても、テーマの選択がユニークである上、呼吸がしやすいと、生理的にとらえ、更にそれを自己の内的な野性的な希望と結びつける点なども Blixen 独特の強い感受性と高い知性を表していると思われる。

テキスト分析ですでに述べたが、例えば、青い色に多くの象徴的意識を持たせている点などは、同時代のリアリズム作家たちには見られない。これは当時としては新鮮な試みであった。

8. 比 喩

Blixen の比喩の特異性については、その考察の一部をすでに記したが、(cf. 学報44, 「詩人」にみるその文体 pp. 92~5) このテキスト中にあっても数多くの比喩(直喩)が *som om, som* (Eng. as if, as) という形で用いられている。これらは事物をあざやかに描き出すと同時に、極めて興味深い、作家の意識下の世界をのぞかせているのである。

- 4) 日中の暑さ→太陽の近くまで登る
- 10) あたりの景色→陶器づくりの仕事の色
- 13) ロマンチックで英雄的な態度→帆を巻き上げた快速帆船
- 14) 奇妙な姿をした森の端→森全体がぶるぶる震えている
- 21) まわりの自然→偉大さ、自由、高貴さへの努力
- 23) アフリカの高原での生活→空中での生活
- 27) 日中の動く大気→燃える焔
- 28) 輝き、波打ち流れる空気→水

29) 野生的な希望→翼

各々の比喩についてはテキスト分析中に述べたが、その種類は日常性を帯びたもの(4) 10) 14) 27) 28)) から奇抜な想像(23))や抽象の世界(21))にまたがって多様である。船に関するものから海を思わせるもの(13))は作者の一連の海底に関する比喩と思われ興味深い(cf.「詩人」にみるその文体, p. 94)。翼から鳥を思わせ更に自由へと導かれる作者の幼い時から持ちつづけた象徴的な意味をもつもの(29))が目につくが、また、日常的ではあるが大気を焔に(27))、空気を水に(28))譬える種類の比喩は原始的で深い意味を含むように思われる。具体的なものを抽象的なものに(21))、反対に抽象的なものを具体的なものに(29))という手法も Blixen はよく用いる。日常的なものでもイメージの組合せに奇抜さを与える 4) などには新鮮味を覚える。

作家の生命力としてのイマジネーションの豊かさは比喩を駆使することで示され、そこに作家の創作力が躍動していることを感じさせられるのである。Blixen の作品にはこの比喩が豊富にみられ、これが文体上の大きな特徴の一つになっている。それらは読者を思わずほえませ、考えさせ、驚かせ、彼女の操る言葉と思索の世界へとわれわれを導き入れるのである。(つづく)

注

- 1) IDUN IV pp. 33~38
- 2) 内容については、‘カーレン・ブリクセン「SORG-AGRE」一人間の条件’(外大. 学報 31 1974, pp. 67-82) に発表した。
- 3) カーレン・ブリクセン—「詩人」にみるその文体—(外大学報 44, 1979, pp. 81-101)
- 4) ‘SORG-AGRE’ p. 427…しかし荘園は丸天井の形をした木々の群の中に、しなの並木道のつくり出す荘大なピラミッド型のシルエットが大空に向かってそびえ立つ場所に位置していた。…
- 5) ブリクセンの父は彼女が10才の時に自殺し、彼女はその父とよく散歩した二人だけの世界にひたることがしばしばあった。(Titania: p. 22)
- 6) cf. *The Life and Destiny of Isak Dinesen*, 1970, p. 113.
- 7) 高地生活：…この開口部から人々は低地に休養に出かける。なぜならば 2000メートル以上の高地にながくすむと、慢性高山病に罹るからである。(松枝張：エチオピア絵日記 1976 p. 22)
- 8) ‘Den unge mand med Nelliken’, *Vintereventyr*
貴婦人ヘレーナは航海中、船火事に会い一人の水夫に助けられ、彼と別れてからもまわりの世界が青かった時のことが忘れられず、本当の青色の陶器を求めて旅をつづける。やっとそれをみつけ、死んだらその中に自分の心臓を切り取って入れてくれるようにたのむ。
- 9) ‘Peter Rog Rosa’, *Vintereventyr*
船のりの妻は、夫がへさきの婦人像の目にブルーの宝石をはめた事をしっし、それをガラスに取りかえる。その後彼女は眼をわずらい航海中に夫の船は昼間、岩にあたり夫は再びもどって来なくなった。
- 10) 追風 (*Osceola*, p. 147)
ブリクセンの少女時代の作〔…青いのは頭上の風、…青いのは足下の海原…〕 はじめペンネームとして *Osceola* をつかい、死後、同じタイトルで初期の時代の作品が一冊にまとめられた。
- 11) ブリクセンは首都南部の漁村に滞在中‘青い部屋’に生活し、(cf. 学報 33, p. 158), ‘アフリカの農園」執筆中の愛用の自動車も青い色だったという。(Titania, 108)

- 12) 短編中の作品中には明らかに「アフリカの農園」経験を素材としたと思われる箇所がちらばっている。そのほんの一例であるが、原住民のキナングユイの鼻のことを述べた116頁は「イップとアデライデ」107頁の記述として用いられているといったことである。
- 13) *Osceola*, p. 141 'Vinger'
- 14) 「アフリカの農園」執筆当時、すでに帰国後数年たっていたが、1934、35年の処女作「七つのゴシック物語」が予期せぬ成功をおさめたこともあって、この第2の作品は出版社も定まり、作者は落ちつく場所もユトランド北端のスカーエンにみつけ、精神的に余有をもっていたと思われる。